品川へのコメント（戸谷）、『倫理学論究』、vol.1, no.2, (2014), pp.21-23

品川哲彦「神に対する人間の責任という概念は成り立ちうるか」へのコメント

戸谷洋志[1]

品川哲彦氏(以下、品川と略記)の発表「神にたいする人間の責任という概念は成り立ちうるか」[2]は、ヨナスの先行研究に対する批判を通じて、『責任という原理』の非神学的な思想と、論文「不死性と今日の実存」および「アウシュヴィッツ以降の神概念」など展開される独創的な神話の思想との連関を探るものである。それによって、『責任という原理』では論じられないものの、しかしその思想のうちに位置を占めるべき「神の前での責任」のあり方を――「神にたいする責任」が誤解であることを提示することで――より明確に輪郭づけている。

品川の推論は、全体を俯瞰し、時系列に従って捉えなおせば、次のような形で再構成される(品川が言及していない書誌情報も示している)。ヨナスは 1962 年に *Harvard Theological Review* の中で論文"Immortality and the Modern Temper"を発表した。これを読んだブルトマンが、ヨナスに対して評言を書簡で送り、これに対してヨナスも書簡で応答した。ブルトマンは、同論文の中でヨナスが「神にたいする責任」と「神の前での責任」という本来区別されるべき二種類の責任のあり方を曖昧なままに論じている点に不満を呈した。ヨナスは応答の書簡の中で、ブルトマンの不満に対しては反論しなかった。従ってこの二種類の責任は区別さるべきであるというブルトマンの見解を引き受けた。翌年の 1963 年に、同論文が改題された「不死性と今日の実存」と、このブルトマンとの往復書簡とを収録した『無と永遠のあいだ』が公刊される。ヨナスはさらに、同論文を収録した『生命の哲学』(英語版 1966 年、ドイツ語版 1973 年)を発表する。1979 年に『責任という原理』を発表する。同書では神話による説明は用いられないが、責任の対象、すなわち「～にたいする責任」の定義が鮮明に提示されている。ヨナスに拠れば、責任の対象の条件は存在を脅かされうるという可死性であり、そうである以上、存在を脅かされない神は責任の対象にならない。5 年後の 1984 年、ヨナスは *Reflexionen finsterer Zeit. Zweit Vorträge von*

---

[1] 戸谷洋志（とやひろし）。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。

[2] 品川哲彦、「神にたいする人間の責任という概念は成り立ちうるか」からの引用は、文中に（）内に本号所収の該当頁をさす。

Fritz Stern und Hans Jonas において講演論文「アウシュヴィッツ以降の神概念」を発表する。同論文の中では再び神話が主題となる。ヨナスによれば、人間は無力な神を気遣い、神が悔いるような事態を回避するために、世界に対して責任を負う。それはある意味では「神の前での責任」である。このように俯瞰すれば、ヨナスは「不死性と今日の実存」以降、「神にたいする責任」と「神の前での責任」を区別し、前者を否定、後者を肯定するという形で責任倫理学の思想を展開しているといえる。そしてその発端をなしているのは、ブルトマンの評言なのである。ところが、そうであるにも関わらず、ヤンゾーンらはブルトマンが二つの責任のあり方を同一視したと解釈し、その上それをヨナスの責任倫理学の定式として解釈している。この解釈は、ヨナスの責任倫理学の理論的な構造について、少なくない誤解を与えるため、退けられなければならない。

もし、以上の筆者の見解が正しいのだとしたら、一点質問を提示したい。それは、ヨナスは本当にブルトマンの不満を自身に対する批判として認識していたのか、ということである。

『無と永遠のあいだ』に収められているブルトマンの評言は、大きく分けて三つの部分から構成されている。同書の頁数で示せば、S.63 から S.65 の第三段落までがブルトマンによるヨナスの主張の要約、S.65 第四段落から S.66 の第二段落までが品川の引用している責任概念に関するコメント、箴言の引用を挟み、S.66 途中から終わりまでが、美学的な神概念(品川の表現では「神義論」)などとヨナスの比較、である。三つ目の部分(S.66 途中から終わりまで)は明確に批判である。では、二つ目の部分(S.65 第四段落から S.66 の第二段落まで)が批判であるかと問われれば、そうであると言い切れる根拠は見いだし難い。それを裏付けるように、ヨナスは応答の中で次のように綴っている。

> さて、貴方の異議に対して。それは二重の形をとっています。すなわち、観点が「美学的なもの」であり、「外側からの」ものであるということ、そしてそれは「固有の実存了解の表現ではない」ということです。私にはこの異議を完全に否定することはできません。それでも、私は適正に判定したいと思います。[3]

ここから分かるように、ヨナスが「異議」として認識していたのは、筆者の区分でいえ

[3] Jonas, Hans, *Zwischen Nichts und Ewigkeit. Zur Lehre vom Menschen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1963, S.69

ば三つ目の部分だけであり、責任に対するコメント(二つ目の部分)はそこに含まれていない。そうだとすれば、たとえヨナスがブルトマンの異議を受容しているのだとしても、ブルトマンの責任に関する見解までも受容したことにはならない。

品川は、「ヨナスがブルトマンに『あなたが私を誤解した唯一の点』(ZNE:72)と応じているのが神義論の疑惑である以上、ヨナスは責任概念の用語法に関するブルトマンの質問をその批判を含めて受容したと解すべきである」(10－11 頁)と論じている。しかしヨナスは、S.69 の第二段落から品川の引用している S.72 の第二段落まで、あくまで「異議」に対して応答しているのであって、ここから「責任概念の用語法に関するブルトマンの質問」に関するヨナスの見解を引き出すのは困難ではないだろうか。そうだとすれば、この品川の推論の妥当性にも疑問を抱かざるを得なくなる。それでもなお、ヨナスが「責任概念の用語法に関するブルトマンの質問を自身に対する批判として認識していた、と確証できる根拠はあるのだろうか。